エゾマツ

北海道ボランティア・レンジャー協議会
第１８号
発行責任者　河村　千東
1991年10月14日

巻頭言

夏の盛りの緑に酔いしれて

副会長　　大友　健

私は常日頃、樹木には季節の色があり、これらの樹木が構成する森には、森の色即ち山の季節の肌色があると、心たのしく移り変わる色を眺めて思いにふけるのである。

季節が樹に色をつけてくれるのか、樹木が季節感を感じ色づくのか、そんなことを考えながら見ていると、何時か自然の中に、身が溶け込んで楽しさが湧いてくるのである。

札幌都心部に近い山としての、天然記念物指定の円山、藻岩山の木の葉の茂り具合や、色づき具合、そして落葉の頃など、季節の移り変わりを知るカレンダーとして、見る人々も多く、便りの季語にも気軽に用いられている。

山の色が多彩で美しいと言うことは、活力の溢れる種々の高、中、下層木の樹々の多い山であると言うことにもなる。

五色で彩られる山々と、七色にも見える山々など、遠く、近く眺めるとき色別区分が、おおよそであるができ、その区分される色の構成が、森林美として景観を創りだしているのではないだろうか。

庭先のナナカマドの木をよく見ると、もう西の陽を日中まともに受けるためか、秋の色を出し始め、季節のめぐりを五色の葉色で示しているのに驚くのである。

濃き緑、そして黄緑そのものの濃淡、葉先部分の紅葉と、単木のため森林環境とは別の条件があると思う。

今頃は、林内深く入り林床から梢を見上げると、木々の葉をとおして、緑の色が降りそそぐように落ちてくる。

ミズナラの梢をとおして落ちてくる緑の色は、格別にさわやかさを感じさせる。

緑の光を受けると、人間はなぜか安らぎを覚えてくるのである。

森の植物仲間の葉の開舒の順も、最下層から始まり、最上層部が最も遅いと一般的に見られている。

このようにして、林内のすべての植物に、まんべんなく光が配分されることになるわけである。

森の最上層を占める高木たちは、光を独占できる地位にありながら、林床の野草たちの生存にも気くばりしていると思うと、木々たちの動植物に対するやさしい心のようなものが感じられるのである。

太陽光の中で、エネルギー量が最も多いのは、緑色の部分だと言われている。

林床から見て、高木たちの葉が緑色をしているのは、緑の光が葉を通過して林床に降りそそいでいるからであると言う。

太陽光を、自由に使える位置にあるはずの高木たちが、光合成に緑光を使わないで、エネルギー量の少ない、赤と青紫の光部分を使っているのだと言うことを聞くのである。

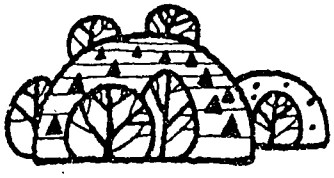
葉の開舒といい、緑光の透過といい、こんな現象を知ると、森はすべての生物の共存共栄を原則として、生きづづける社会の構成と考えても当然であると思う。

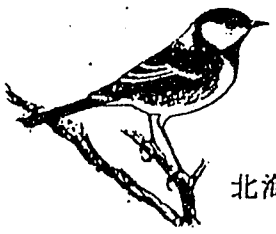
豊富な栄養を含有している木々の葉は、動物、昆虫にとっても貴重な食料である。

樹木は、葉量に余裕をもって生産活動をしているので、虫達の喰には寛大な広葉樹が多く、被害木として終命するものは少ないのである。

夏の森の色は、やがて美しい秋の色づきを演じてくれる基になるだけに、恵まれた気象環境のこれからであってほしいと願うのである。

夏の森に、種々の想いをめぐらすとき、何時も浮かんでくるのは、十和田八幡平国立公園地域の、奥入瀬の渓流を抱くような、ブナ、ミズナラなどの群落の、木もれ陽は緑の光りで、奇岩と滝が織りなす景勝の地だけに、私のこころにすばらしい色彩として輝き、忘れ得ない緑の美しさの一つになっているのである。





平成２年度「野幌森林公園森林観察会」の報告

特別寄稿

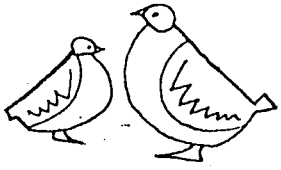
北海道野幌森林公園事務所　公園利用課長　春　木　紘　一

平成２年度における北海道野幌森林公園事務所主催（協力）の「森林観察会」は、次のとおり、月１回のペースで実施しました。

この観察会の実施にあたっては、河村会長はじめ「北海道ボランティアレンジャー協議会」の皆様方には、お忙しい中をお手伝い頂き、おかげをもちまして、無事、当初のスケジュールを消化することが出ましたことを厚くお礼申しあげます。

今年度も、皆様のご協力を得ながら、既に５回の観察会を実施しましたが、「春の森林観察会」は１１０名・「夏の森林観察会」は６９名の参加を数えるなど、年々その参加者は多くなる傾向にあり、野幌森林公園事務所が月一回ペースで実施しているこの「森林観察会」も徐々に定着してきております。

今後とも、「北海道ボランティアレンジャー協議会」の皆様方の、より一層のご協力を宜しくお願いいたします。



（事務所主催、道ボランティアレンジャー協議会協力行事）

◎　四季の森林観察会（３回）

春の森林観察会／夏の森林観察会／冬の森林観察会

「大沢口」９時３０分集合、「大沢園地周辺」を約 5.5ｋｍを観察、

１４時３０分「大沢口」解散。

＊　秋の森林観察会は雨のため中止。

◎　月例観察会（６回）

「開拓記念館」１０時集合、「瑞穂連絡線」を約 1.5ｋｍを観察、

１２時「瑞穂の池」解散。

（道自然保護課主催、道ボランティアレンジャー協議会・事務所協力行事）

◎　野幌自然フォーラム（１回）

「記念搭広場」９時３０分集合、「瑞穂連絡線」を約 1.5ｋｍを観察、

１３時から「開拓記念館」で自然フォーラムを実施し、１５時解散。

（道ボランティアレンジャー協議会主催、道自然保護課・事務所協力行事）

◎　野幌自然観察の集い（１回）

９時３０分「開拓の村」集合、「瑞穂線」約 0.8ｋｍを観察、

「瑞穂の池」でネイチャーゲームを実施し、１２時３０分解散。

なお、観察会の参加状況は別表のとおりです。

平成２年度　森林観察会参加状況

行事名	実施月日	曜日	天候	参加者数 一般	ボラレン	道自保課	事務所	合計
月例観察会	4月12日	木	晴	３３	3	－	2	３８
春の森林観察会	5月13日	日	晴	４５	3	－	5	５３
野幌自然フォーラム	6月10日	日	晴	１６０	１４	２０	5	１９９
月例観察会	7月12日	木	晴	１４	6	－	5	２５
夏の観察会	8月12日	日	晴	４４	6	－	5	５５
野幌自然観察の集い	9月 9日	日	晴	３６	３１	5	5	７７
秋の森林観察会	10月14日	日	雨	（雨のため中止）				
月例観察会	11月 8日	木	晴	２１	3	－	3	２７
月例観察会	12月13日	木	晴	１６	4	－	3	２３
月例観察会	1月10日	木	雪	7	4	－	4	１５
月例観察会	2月14日	木	晴	１２	4	－	2	１８
冬の森林観察会	3月10日	日	晴	３８	１０	－	3	５１
合計				４２６	８８	２５	４２	５８１

観察会に出席の方々には、

そこに貴重種があるから、又は、そこに珍しいものや美しいものがあるから、そこの自然が大切なのではなく、ごく一般的なものばかりであっても、そこにある一つの安定した自然生態系（あるいは、微妙なバランスの中に成り立っている自然生態系）そのものが大切であるということを知ってもらう。

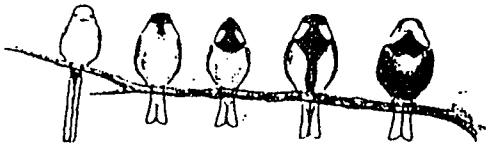
まづは、観察会を通して自然の素晴らしさを実感していただく、そして、自然の見方（読み方）を学び、自然の大切さを理解し、現代に生きる我々はどの様に自然に接するべきなのか、自然との付き合い方（マナー）を考えてもらう。

自然観察会は、そのキッカケを提供する、又は、お手伝いをすることであろうと思います。

＊＊＊　森林観察会のお手伝いをして頂いているボランティアレンジャーの方々と森林公園事務所職員で、毎月２回（観察会当日と観察会下見の日）一緒に森を歩いております。

他の皆様も、勉強会として、実践セミナーの場として、楽しみながら、お気軽にご参加ください。

お待ちしております。＊＊＊＊＊



特別寄稿

一人でも多くの仲間を

北海道保健環境部自然保護課長　高村隆夫

例年にない涼しい夏を過ごしていますが、ボランティア・レンジャーの皆さん、如何お過ごしでしょうか。

四季の変化に富んだ、デッカイ自然、多種多様な動植物、本道の自然環境は我が国を代表するものだと思います。

皆さんのなかには、この夏休み中にゆっくりと大自然の醍醐味を満喫された方もいることと思います。今、北海道は一年で一番いい季節を迎えています。この恵まれた北の大地に住む幸せに感謝したいものです。ところで、日本人は自然との付き合い方が下手だといわれています。たいてい野山に入る時、山菜や茸などを求めたり、紅葉狩りのように行楽的団体行動をとることが多く、ゆっくり自然を観察したり一人静かに散策するといった行動をとることは少ないといわれています。

また、野外での吸殻や空缶の投げ捨て、トイレ使用マナーの悪さ等、公徳心の欠如が指摘されているところです。

木の文化を築き、花鳥風月を愛でた侘び、寂びといった先人の血を引く日本人の自然に優しい心はいったいどこへ行ってしまったのでしょうか。キット、生活や仕事の忙しさに紛れて、自分自身を見失っているだけだと思います。

これからはますます都市化が進み、余暇時間が増え、人々は自然を求めていくことが予想されます。自然は、日本人が見失っていた心のゆとり、優しさ、思いやりを取り戻すきっかけになる筈です。

自然はかけがえのない財産です。

自然は、一旦破壊されてしまうと元に戻すことは至難の技ですしまた復元するにしても長い年月を必要とします。

そのためにも、自然の保護や利・活用には十分過ぎるほどの配慮があっても過ぎることはありません。

今ある北海道の素晴らしい自然環境を２１世紀へ継げていくためにも、道民一人一人が、自らの問題として自然環境の保全に関心を持ってもらいたいと思います。

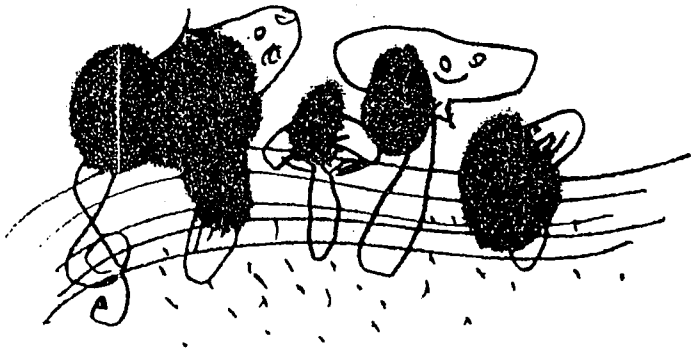
一人でも多くの仲間・自然の理解者を増やしていくことが必要です。是非、ボランティア・レンジャーの皆さんのお手伝いをいただきたいと思います。実践セミナーへの参加や平素の自己研鑽にも努めてください。それぞれの地域におけるサークルや町内会活動、団体や市町村、道が催す各種行事等様々な機会に、奉仕いただければ幸いです。

自然と人が共生する豊かな地域づくりのために。

（1991. 8. 12）

無心

原生林の奥の奥
倒れた大樹のその上に
コケとキノコが絵を描いた
小さな小さなキノコたち
白とピンクの服着てた
秋のうす日を背にうけて
川の流れを音楽に
小人の国の舞踏会



詩集 ―― 「どろ亀さん」より ――
（高橋　延清）

自然と森林浴の手稲山はいかが

会員

札幌市　　加藤　清春

市内の方は知らない人は少ないと思いますが、知っていても歩いたことのある人は以外と少ないのではないかと思い、一寸書いてみましたので参考にしていただければ幸いと存じます。

手稲山は標高１．０２３．７メートル、安山岩で出来た古い火山で、札幌の街の西にそびえる目印の山として親しまれています。

アイヌ語の山名はタンネウエンシリ（長い崖を持つ山）と呼ばれ、山頂の西から南に続く断崖をさしているものと思われます。

山をとりまく自然環境は、春のエゾムラサキツツジ、エゾヤマザクラの開花に始まりシラカバ、イタヤカエデ、ミズナラなど樹林が深緑の夏を迎えます。

秋には全山が紅葉し、見事な錦絵巻に包まれます。

○　平和の滝～手稲山ルート、８．０キロメートル（健脚向）

本格的ハイキングコースとして人気があります。渓流に沿って登り、岩場や高山植物帯を通って山頂に達するコース。

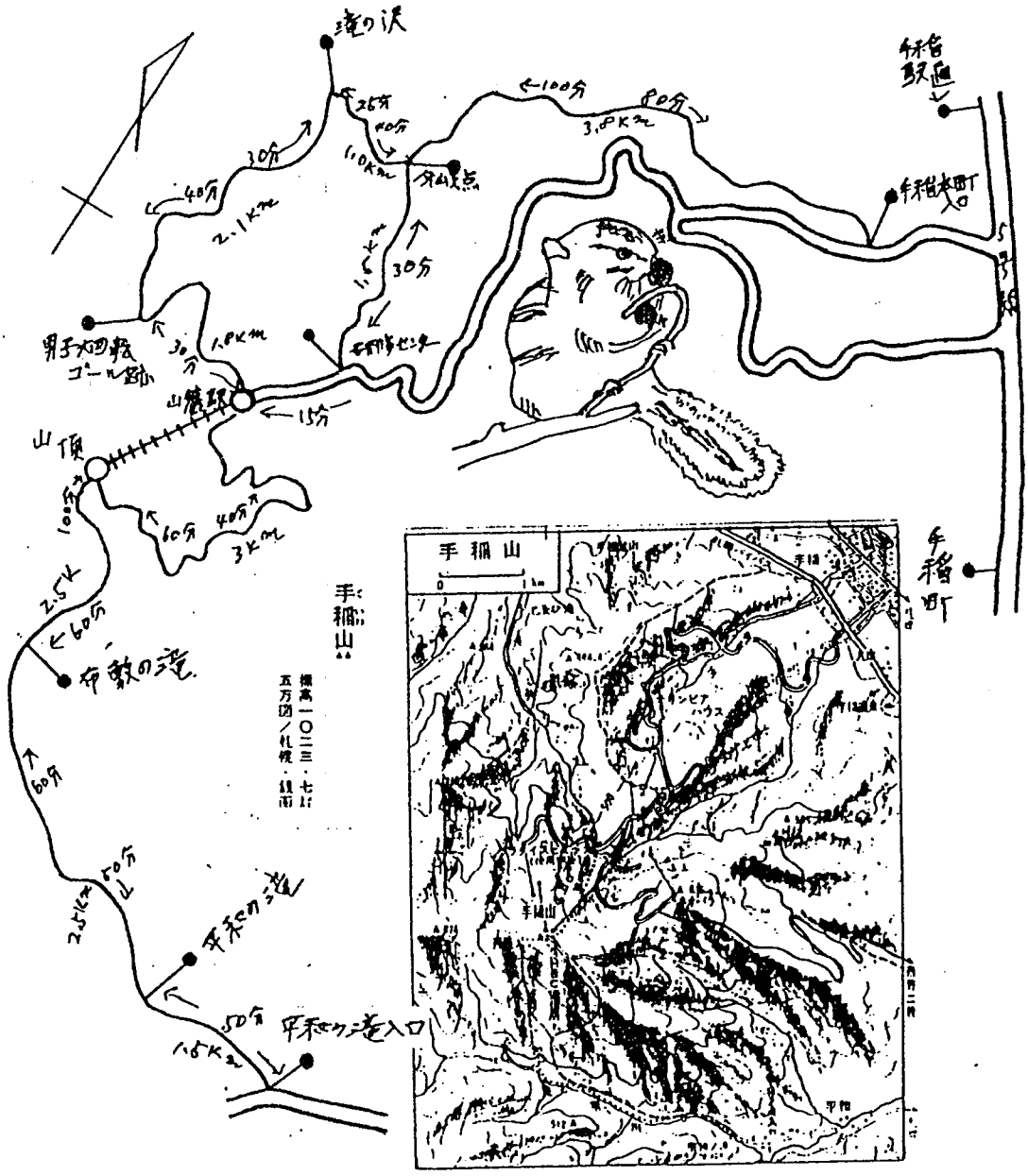
○　手稲山北尾根ルート１１．０キロメートル（健脚向）

石狩平野と石狩湾を背に登るコース。登口は昔の登道の入り口で、手稲本町の札幌バイパスのトンネルをくぐった所にあります。コース中一番きついところは、手稲本町入口から分岐点への中間あたりで、分岐点をすぎればおだやかな登りになります。ロープウエイ山麓駅へ抜けるには、車道に出て少し登れば見えてきます。

◎　交通機関　ＪＲバス →札幌駅前バスターミナル手稲営業所行、 →手稲駅通り・手稲街下車 →手稲本町入口。略図を書いておきましたので参考にして下さい。もちろん草花もたくさんありますよ。

（資料は札幌市緑化推進部自然保護課による）

手稲山登山路略図


滝の沢
男子大回転ゴール跡
山麓駅
山頂
布敷の滝
手稲山
標高一〇二三・七m
五万図／札幌・銭函
平和の滝
平和の滝入口
手稲町
手稲山
0
1km

会員

ヒマラヤトレッキング紀行

1991年　3月31日～4月7日　　札幌市　　菊池　茂

北緯28°東経85°ネパール。今では各国より大勢のトレッカーが繰り込んでネパールの財政を潤しているが、以前は世界の秘境の一つであった。私が初めて山という所に登ってみたのが3年前、何が性に合ったのか知らないが勧められるままに山岳会に入っていた。そのうちに、だんだんエスカレートして“ヒマラヤ”の山なみを見たくなって来た。この足で“ヒマラヤ”の山裾の一部でも踏み締めてみたい。残された時間は少ない。そう思うと“あせり”にも似たおもいで「ヒマラヤトレッキング8日間の旅」に参加する羽目になってしまった。

まだ肌寒い札幌を出発してネパールの首都カトマンズ着くと午前0時の気温が25℃、翌日ポカラでの登山開始時は37℃という猛暑。だが湿度の低いせいかその割りに苦しいとは思わない。今回の“トレッキング”は総勢 150名、それを30名単位に分けうち2単位60名が3泊4日のトレッキングをする事となった。この30名のトレッカーに対して、シェルパー．ポーター．コック等30名がフォローしてくれるのである。従ってトレッカー自身はせいぜい3kg～4kg位のサブザックを背負えばよいのである。その他の必要な品物は別のバッグに入れて名札をつけポーターに預ける。又テントは3～4人用に2人の割り当て。分厚いマット、シュラフ、シーツがついているこれらも皆ポーターが運搬してくれる。まるで大名山行だ。これでよいのだろうか思う。

我々はポカラよりサランコットの丘に入り、アンナプルナ山群の山裾をぐるりと回る約35kmのトレッキングであった。平均1.800m～最高2.500mのup.down.のアンナプルナ山群は秀麗な“マチャプチャレ”を中央に左右に7.000m～8.000mクラスのアンナプルナ1峰～4峰、そしてヒウンチュリー．アンナプルナサウスが並び、大雪山系とは又別な重圧感がひしひしと感じられるのであった。

空からネパールを見ると、見渡す限りの赤茶けた地肌の山岳地帯で

あるが所々にサバクの“オアシス”の様な鬱蒼とした森林があるのには驚いた。一年中で５月ころから10月位までが雨季で11月から４月頃までが乾季というネパールで、その乾季中の水分の補給はどうしているのだろうか？不思議にさえ思われるのであった。
その森林に入ると木という木は何百年経ったかと思われる大木ばかりである。ネパールの国花は“シャクナゲの花”と聞いているが、そのシャクナゲが日本での感覚ではとても想像も出来ないものであった。あの“カツラ”の大木を思い出してみるとよい。殆どがそれ位の大木であった。そして野生の見事な真紅の大輪の花が一面に咲き誇っていた。又、木という木には“サルオガセ”がびっしりと密生し、その適温適湿の故か野生らんが大輪の純白な花を無数に咲かせて寄生していた。それもこれも“ネパール”ならではのスケールの大きさである。この様な寄生の野生らんを見たのは初めての私は只々息をのみ大自然の神秘な営みをみつめていた。

乾季といってもこの様な樹林帯に入ると湿度はある。うっかり草地へ腰を下ろすと、いつのまにかみみず位の太さの“ひる”が２～３匹登山靴の上でうねうねと気味悪く動き回っているのであった。

ネパールでは1.700m～1.800m位から民家が点在する様になる（エベレスト街道では 2.500m 位でも集落があるという）。それらの民家は殆どがレンガ造りである。そのレンガもネパールで造られたレンガは一般の低所得階級が使用し、中国から輸入されるレンガは上流階級の人々の家に利用されているという。よく見ると群落のある場所では色あせたネパールレンガ造りであり住民の服装も非常にまずしく、又中国レンガ造りの集落では子供にいたるまで近代的な服装をしており途中で出会った登校中の子供達はみな赤や水玉のネクタイを締め真新しいカバンを提げていた。

ネパールでは今でもカースト姓（僧．王族．平民．奴隷）なる四種姓がありその階級で生まれた者は生涯そのカースト制に縛られ住居、

食事、職業までもが差別をされるのである。現に今回のトレッキングにおいても“ポーター”として従事している人々はおそらく一番下の奴隷にランクされるのであろうか？我々の毎日の食事で余分はシェルパーが食べ（それらを見越して作られるのであるが）たとえそれが残ったとしても決してポーターの食べる事はゆるされないのである。生きるためとはいえ15才～18才位の子供が大人と同じ仕事に従事し、カースト制によって食事までも制約を受けるのはどうしてだろう。我々日本人としては考えられない現実である。しかしこの国に生まれ育ったものにとっては当然の事として受け止められ、それに対して何ら疑問すらいだく様子さえないのである。

だが近年外国からのトレッカー等による影響であろうか、ネパールでも民主化の機運がもり上がり我々が“ポカラ”に戻った時には丁度選挙戦の真っ直中。各候補が日本と同じ様にトラックに乗り、公園やバザール等人々の集まる所で車をとめ演説をしていた。

さて我々はトレッキング中ネパールの人々と話しをし、子供達と写真を撮った。そして仲間同士が自身のネパールに関しての考え方を話し合い単に山を歩くというよりもそこに住む人々の生活様式、考え方（推測の域をでないが）等を見、自分たちの日本における現実の生活と比較でき改めて世界の中にこの様な生き方、この様な生活様式で満足させられている人々もいるのだという事をこの目でこの肌で感じとったのであった。

あっという間に過ぎた８日間、毎日が好天に恵まれ心ゆくまで“ヒマラヤトレッキング”を楽しむ事が出来た。そして無事歩き通せた。満足感がふつふつと沸き上がって来るのを押さえる事が出来なかった。

会員

自然と調和ある開発，

自然とのふれあいを思う

積丹町大字余別町　　眞壁　侑司

積丹町では、半島周遊国道の開通など新たな動きに対応した町の振興発展を図るための新しい原動力とすべく、余別地域の優れた自然条件を生かし「森と水と人を介した都市住民との交流の場づくり」をテーマに「ふれあいの森建設構想」の誘致を図ろうとしています。

あわただしい都市生活のなかで自然にふれあうことも無く、自然の力に畏敬や恩恵を感じない人間たちに、ほったらかしのままの自然はもったいない。かといって大企業による利潤追及の乱開発が考えられる昨今、これらをを防ぎながら広く道民に、いや日本中の人々に自然の大切さを教えてくれる自然と文化の調和ある生き甲斐の森づくりが、本当の意味での人間と自然のためのリゾート基地となることであろう。

いま、「コープふるさと村ちくさ（灘神戸生協）」に学べで、札幌生協が都会の人々の忘れていたふるさとの憩いや心の潤いを届けたい———で、申し入れをしている。

反公害、自然保護運動の先頭に立つこれらの組織が最小限の手入れで広く人々のためにつくるリゾート構想を援助したいものである。

ゴミ公害、汚水公害、交通公害、都市文化公害等？　地域の人々の懸念を取り除いた、真の意味での「ふれあいの森」であってほしい。

自然とのふれあい、生命の尊重、人との交流、文化の交流、地域への貢献等、自然と調和ある生き方が今一番の贅沢である。

限られた地球の自然という貴重な人類の財産を子孫へ受け渡すためにも、体験学習の場として、また生涯学習の場としても「ふれあいの森」構想の必要性は極めて大きい。

海岸の斜面にはエゾカンゾウが木陰にはオドリコソウ、ニリンソウが咲き、エゾニワトコも蕾を膨らませている。
川のせせらぎを遠くに聞きながら、晴れた日の早朝はウグイスの声で目覚める。
ツツドリのポッポウ、ポッポウ，ヤマバトのデデッポウポッポウという声も聞き分けられるようになり、昨年１１月猛吹雪の日に当地に赴任して以来、やっとこの地の山や川、海が自分のフィールドとして与えられた喜びがわかってきた。

次ぎに、子どもたちや地元の人たちとサケの稚魚を放流した一場面を紹介しましょう。
前日の雨も嘘のようにあがり、晴天に恵まれた５月１８日、サケ稚魚放流式も子ども等の歓声のうちに無事行われました。
おとなたちも喜びと感謝の気持ででいっぱいで、「帰ってこいよう」の声も出たくらいです。昨年の１２月２５日真狩孵化場より、発眼卵５０００粒をいただいて以来実に、１４５日間にわたる飼育観察の成果がこの放流式でありました。
３．８㎝～６．４㎝までのそれぞれ体長に差のある稚魚たちが、子どもたちの手により余別の清流に放たれました。
狭い水槽から大川へ、まぶしい陽光を跳ね返し別れを惜しむかのように岸辺を回遊し、やがて本流へと泳ぎ出しました。

ピクピク動く卵、殻を破って出てくる瞬間や給餌に手元に跳びつかんばかりによってくる稚魚の群れたち、物差しやルーペを持っての観察など長かったようで短かったサケ稚魚たちとのふれあい。特に、生命誕生の神秘や命の大切さ、世話をするという愛情など科学の目だけでなく、豊かな情感も育ったものと感謝しています。
どの子も、３年後４年後の再会を楽しみにしています。余別の川の匂いを、また子どもたちとの思い出を忘れずに元気に帰ってくることを期待します。
“Ｃｏｍｅｂａｃｋ　Ｓａｌｍｏｎ”

振り返ってみると初めは、地元の人の「余別の子どもたちに郷土に生きる喜びや感動を与えたい。何かいいものはないか。」からであった。

積丹町ふるさと創生事業として（まちおこし人材育成のために町の助成を受け）ＰＴＡが中心になり、児童生徒によるサケ稚魚育成体験学習研修事業を興す素晴らしい着目がスタートであった。

町水産課の指導を受け、積丹町漁業協同組合定置網部会の方々のご協力により、飼育小屋が設立。吹雪のなかの導水管の敷設や電動ポンプ、貯水槽の設置など労苦を惜しまない父母の皆様のお陰で町内では類を見ない施設となりました。

これからは、ふるさとの自然を見直し、地域の産業を見直すこと、余別の山や川、海に合った生活基盤をふれあいや観察、体験等を通し感動し理解していくことが大切となります。

昨年のサケつかみどりに始まり、飼育観察・放流と一連の体験は、地場産業としての漁業への関心が高まり、養殖漁業に一段と理解が深まったと感じました。

郷土の自然を守り育てながら、自然と調和のある産業の活性化は、２１世紀に生きる次世代のためにも極めて大切なことであります。

自然環境を守りながら、付加価値の高い産業を興し、健康で文化的な生活をめざすこれからの時代に、ふるさと創生、まちおこし事業としてのユニークな体験学習を今後も継続し、地域の発展とためにささやかながら小生なりの努力をつくすつもりです。

会員

留萌市の自然観察会だより

留萌市　　祐川　弘

今年度も「留萌市海のふるさと館」主催の自然観察会のお手伝いをやっており、すでに３回実施済みですのでその時の様子を概説します。１、２回目は当観察会の基地である「ルルモッペ憩いの森」でした。（「ルルモッペ憩いの森」については、前回紹介してありますので御参照下さい。）

１回目は５月１９日に１７名の参加者で３月に集まって自作し、堅雪をふみしめながらとりつけた巣箱の様子がどうか、期待と楽しみを胸に、自分のを見つけ確認し、歓声が森にこだましました。

シジュウカラなどが営巣しており、例年よりよい結果を得ることが出来ました。反省としては、カラー針金を使ってがんじょうにとりつけたので、風雨に耐えられたこと。自分の巣箱を確認するためには大きく太く名前を書くこと。（特に底の部分に書いておくと発見しやすい。）冬と春では森の様子が変貌するので、メモ、スケッチをして設置場所を確認しておくことなどでした。

この時のハイライトは、小学生の低学年が、木の枝で何かをつつきそうなかっこうでミズナラの木を観察しておりました。見るとエゾハルゼミが脱皮をしようとする直前でした。早速全員を集めて観察が始まり、セミもこれにこたえるかの様に徐々に脱皮をはじめ、変わりいくセミの色や、小さくてちぢんでいる羽が徐々に一人前に変化していく様子をかたずをのんで観察することが出来、自然の神秘に魅せられました。

草木は４０種ぐらいの名称があげられ、特に印象深かったのはカラマツソウ、フデリンドウ、ウメガサソウ、イチヤクソウ、サンカヨウなどでした。サンカヨウについてですが、昨年の観察会の時に若干の群生している谷間があり、次回にあの美しい実を観察するのを楽しみにしていたのですが、次に行った時には、森の管理人によって草刈機で坊主にされ残念な思いをしました。ところが今年は昨年と様子がかわりきちんと保全されておりました。聞いてみると会員の中に熱心な主婦の方がおられ、管理している市に電話をし、部長さんを案内して現地を知らせ概要を説明して、その場所を残してもらう様に依頼したのだそうです。

本来は世話人の私達が行うことを、熱心な会員の方が積極的に働いてこの処置をしてくれたことで、私としてはすごく勉強になったとともに、深く反省も致しました。各地で一寸したこのようなことが実践されればよい結果が得られ

るものと感じました。

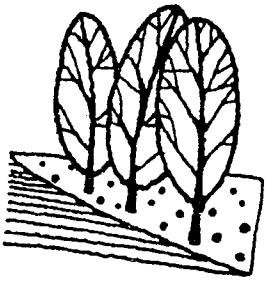
さて２回目ですが同じ森で６月３０日に実施しました。植物ではユズリハの発見が印象的でした。この時のメインは鳥でした。

１回目の時に真近で望遠鏡にとらえたウグイスに魅せられましたが、今回は図鑑の表紙にのっているオオルリが見たいと言っていたところ、昼食時に鳥担当の先生が発見、望遠にバッチリと木の先端に止まっているのをとらえてくれました。鳥も私達の期待にこたえてくれて、くるりと３６０度の回転をしてくれながら、全員が２回ずつ観察できる間じっとしてくれました。この様なスタイルでホオジロも観察できまして鳥に対する愛着が一段と増している近頃です。無理をしながらなんとかズームの望遠鏡も入手することが出来、次回を楽みにしています。

さて３回目、４回目は経路の変わったところで、３回目は留萌市黄金岬で磯の観察会が実施され誠に楽しく勉強になりました。

４回目は達布の山奥に化石（アンモナイト）の観察に８月１８日に出掛ける予定です。この様子についても機会が得られれば紹介したいと思っております。

各地でご活躍の会員の皆様と、お世話いただいている幹部や事務局の皆様の御健康と御活躍を念じつつ終わりにいたします。



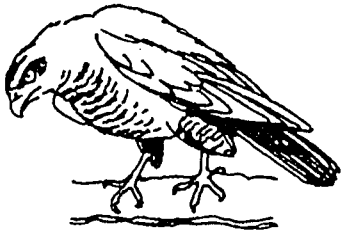
会員

カツラの木

岩見沢市　　山口　慶彦

昨年の４月の中旬に、はじめて野幌森林公園の、開拓の村から瑞穂の池まで歩いてみた。その時は、ただ何となく歩いてみた、と言うようなものであったが、もう一度行きたい思いが強く残った。一週間程して公園の入口で案内図をもらい、それぞれのコース歩くことにして１日３時間ぐらい弁当持ちで３日程通ってみたが、同じコースを歩いても毎日その印象が違うのに驚き二週間もしたらその様子は一変してしまう自然のすばらしさを発見した。その頃、ボランティア・レンジャーを知りテレビで活躍の様子を見て、８月の講習会に参加させてもらい、私なりに、最大の目的は、自然を大切に、人間は自然と共存しているのだと理解した。特にカツラの木の生命のすばらしさ、子孫を残すための

努力を講習会の観察実習で知り得た。だがカツラの木も、その生育する土壌環境が必要であろう。残された原始林だからこそ、あれだけのカツラの木があるのではないだろうか。今の日本では出生率の低下に困惑しているが、カツラの木と同じで、子供の育つ社会の土壌が欠けていると思われる。あらゆる面で、広い意味で自然破壊を私達がしている間は国の破滅から地球の破滅に連なるのではないだろうかと考え、先ず私の出来ることとは何か？それは自然保護と心に決めて日常を送る、これが心の張りに、一日一日が有意義に過ごすことができる。先日６月７日友人と樽前山に高山植物を眺めに行ったとき、大阪の老夫婦と一緒に登ることになった。老夫婦の今回の北海道旅行は、ただ樽前山に登ることだけとのお話をしておられ、樽前草を見たいとのことであったが、残念ながら咲いてはいなかった。ウコンウツギが満開でイソツツジが二分咲であったが、その美しさに感激し、また頂上からの眺望で樹海の広さに驚いておられ、ガイド役を買って出た私も満足でした。主人の方が高山植物を見ながら、この植物はここの環境が一番良いから立派に生育するのであって、もしこれを自分の家の庭に植えても無理であろうと言われたので、私も自然の大切さを訴え意見の一致を共に喜び合った。自然を知るためには一日でも多く自然と親しむことだと思う。４月の中旬も終わろうとする頃、野幌森林公園のカツラのコースを歩いた。カツラの木のすばらしさを眺め大沢園地で休んでいたら遠くから水鳥かとおもわれる鳴き声が聞こえて来た。その数も相当なものだと思い大沢池に向かった。だが残念ながら水鳥は一羽もいなかった。
大沢園地にもどったらまたすさまじい鳴き声、また立ち止まり考えたら、エゾアカガエルの鳴き声であった。だが私にとっては早春の自然を知り得た喜びの方が、自分の知識の無さより強く感じた。最近はゴルフ場の開発が道内のあちら、こちらで聞かれるが、おそらくカツラの木は芝生の中に立つ一本の木としては生育できないであろう。だからこそ自然を大切にしなければならないと思う。



一般

「夏の野幌森林公園観察会」に参加して

札幌市　　村田　香代子

8月4日、初めて野幌森林公園へ行き、自然観察会に参加させていただきました。大沢口への道路から、一歩、森の中に踏み入ると生い繁った木々に、夏の日ざしがさえぎられて、あたりの空気の匂いまでが変わって、別世界にまぎれ込んだ錯覚に陥りました。一番印象深かったのは桂の大木、威風堂々とそびえるその姿は今も目に焼きついています。

本当に夏の森は生気に満ちていると感じました。木々や草花は青々とその葉を繁らせ、あるものは花を咲かせあるものは子孫繁栄のために小さな実をつけ始めています。

無知な私には名前さえわからないものが沢山ありました。ボランティア・レンジャーの方々から説明を受けて、なるほどその場では理解したつもりでいたのですが、今となってはかなり忘れてしまったようです。

昆虫たちもたくさん見かけました。トンボ、蟬、蝶、バッタ、カミキリ虫、カタツムリ、カメムシ、クモ類、クワガタムシ、そしてあまりそばに来てほしくないスズメ蜂の仲間、毛虫や青虫等、みんな黙々と生きていました。彼らの事も、正確な名前、生態、他の生物等との関係等、いろいろわかったらどんなに楽しいかと思います。

私はよく小学生の2人の子供を連れて、戸外に出かけます。それは、キャンプや、海水浴、近くの公園の散策、山菜摘り、きのこ狩り、バードウオッチング等なのですが、心身のリフレッシュになり、又親子のコミニュケーションにもずいぶん役立っているように思います。本来、子供というものは、大空の下で遊ぶのが大好きとみえて、昆虫とも、草花ともすぐに友達になります。今回の観察会も2人の子供を連れての参加でしたが、いろいろな事を教えていただき、もっともっと自然の好きな子になって欲しいと思っています。

木々の葉が赤や黄色に色づく頃、また野幌森林公園に訪れたいと思っています。その時は、今回あまり見かけなかった野鳥や、のっこり顔を出したきのこに逢えるかもしれません。ボランティア・レンジャーの皆さん、またよろしくお願い致します。

会員

インストラクター講座に参加して

北見市　　和泉　いさむ

５月２１日から、３泊４日で美唄市の道立林業試験場の研修センターを会場に行われた講座に、２１名の仲間が集まり受講してきましたのでその一部ご紹介したいと思います。

この講座の専修コースということで、私のような知識のないものが受講するには躊躇したわけですが、「森林リクリエーション」の見出しに魅せられ、これだけは何とかなると思い参加させていただきました。

目的地には思ったより早く着いたので、試験場構内を見て歩いていたら、農家の横から私の方へ山ナマズ（青大将）２匹が出迎えてくれました。研修センターはもちろんですが、宿泊施設も新しい建物で自然環境もすばらしいところです。予定の時間になってきたら、山歩のスタイルの人々が次々と集まってきて、研修センター内は熱気に包まれた中、開講式の運びとなり、参加者、講師の自己紹介と引き続き講義に入りました。参加者全員が講師の話をもらすまいと、学ぼうとする姿勢が伺われまた。講師の先生方も理解しやすく、親切丁寧に教えていただきましたので、私も大部分を理解することができました。それが終わると隣接する宿泊所に行き夕食をとって一日目を終了しました。

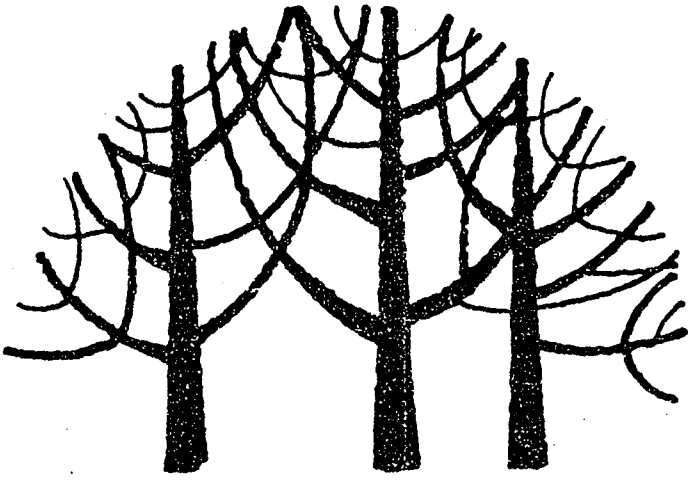
２日目は、講義がおこなわれるかなり前から、研修センターに集まりいろいろな話が交わされていました。植木屋さん、高校教師、森林関係者、レンジャーの人々と多くの領域から集まってきているようすが伺え、和気藹々と話しているうちに、午前中の講義が始まりました。

午後からは、実習ということで、昆虫、木の葉の標本づぐり。これは時間がないため簡単に何人かの人にしてもらったが、木の実や枝などを使った工作に全員悪戦苦闘をし、自分の思いついているものがなかなか出来ず、何とか１人１品製作ということで、完成させ評価をしあって皆で笑った作品を手元にいただいてきたので、それをたまに見ると皆の顔が思い出されます。この夜は全員早めに寝たようでした。３日目に入りすつかり顔と名前も一致してきて仲間意識も出来て、小グループが自然に出来てきたようです。今日は朝から現地実習でバスに乗り「道立砂川少年自然の家」に向かい、現地に着いてすぐ目を引いたのが西洋のお城をおもわせるオアシス館が見えて来て大きいのに驚きました。聞くところによると１８年間の歳月をかけて作られたこの広場は、野外活動に必要なあらゆる施設があり、平成３年に完成をみたばかりとのことでした。そ

れにしても交通の便利もよくＪＲ、国道は近くそれに高速道路は公園内にサービスエリアがあり、このようなところに、自然があるとは思えない所です。
私達一行は利用に際しての説明を受けた後、裏山に上がり「レク」を楽しみ、そのあと展望台のある「石山公園」に登山することになり、その道端の途中、自然観察をして講師の先生の説明をうけゲームをしながら頂上をめざし、全員頂上にたどりついて、展望台に上ったら晴天に恵まれて、遠くの山なみが眼下に広がり心も晴々しくなりました。そこは「マムシ」の注意の看板があっちっこちにとある中で、ゲームを楽しみここちよい汗を流しながら下山し、宿泊所へ着いたときはもう夕食の時間帯になっていました。今夜で宿泊が最後なので講師の先生と一緒に食事をすることになり、地域の情報交換となりレクゲームも飛び出して盛り上がり、中には美唄市まで足を伸ばした人もあり、親交を深め、最終日をむかえ閉講式には全員終了証を手にしました。

林業試験場の関係講師の先生の献身的な態度に対し、この章をかりてお世話になったとお礼を申し上げたいと思います。

講座で習いましたことは、地域にこれから広めていきたいと思っておりますので、どうか仲間として、これからも指導願えれば幸いと存じます。そして参加者に対しては又、どこかで逢えることを楽しみにしておりますので、全員元気で活動して下さい。



「北海道ボランテイァ、レンジャー協議会」

第６回定期総会

《総会報告》

第６回総会は、８月２４日、札幌市職員会館において、道より自然保護課中川主任のご臨席をいただき、出席者２０名（委任状３６名）により開催されました。議長には、吉野明彦　氏（１回）が選出され、議事が進められた。

会長病気入院中のため、少しく寂しさを感じましたが、総体的に新規の会員のかたがたの出席もあり、協議事項の発言には、建設的で熱意のある点で多大の成果がありました。議事につきましては、事業報告、決算報告、監査報告と進み、特に大きな質疑もなく、次年度繰り越し額が、収入額の４０パーセントを占めている点の説明として、会計担当及び事務局長より、会議費印刷費、通信費、など役所の便宜供与を多大に受け、実経費の支出がすくなくすんでいる点と、これが、次年度会費の完納までの、つなぎ資金となっていることで、質問者の了解を得ました。平成３年度の事業計画案については、前年度とほぼ同じ計画内容であったが、出席者の建設的意見として出された事項は、◎会員研修後などを利用して、役所側との懇談会をもってほしい。◎フイルドは、野幌森林公園に固定する事なく、新鮮味の点からも、外の場所を考えてほしい。◎会報などを利用して、グループ的な観察会を考えてほしい。◎地方会員の組織化は、焦る事なく、行事の実績により推進して行くべきである。これらのことについては、おおいに事業計画に取り入れ、実施するよう会員みんなで頑張りましょう。新年度の事業予算については、新会員については、会費の納入案内を徹底することとし、役員の補選となっている、研修部長については、部員より代行者を決め、担当副会長は充分な補佐役をすることとなりました。最後の議案となっていたボランテイァ保険の加入推進については、加入費を還付して、加入の意識を高めるとともに、協議会の事業としてとりいれ、ボランテイァ活動の推進につなぎたいとの総意を得ました。

その他事項としては、広報部長より、会報の編集方針、会員の投稿の依頼などの説明があり、私たちの会報を素晴らしくしようとの決意に燃えました。このほかとして、会の運営等についてもさまざまな、意見要望など出されましたが、これらについては、ボランテイァ精神で、自然を愛好する仲間として時間をかけ、焦る事なくあゅみのなかで、方向づけをする点で了解しました。

以上で総会のすべてが、予定どおり終了し直ちにその場で、缶ビールを手にして懇談に入りました。会議の時間は、２時間３０分でしたが、古い会員と新しい会員が、出席してくれましたので、事務局側としても考えを新たにさせられた点が多くありました。地域的には、札幌近隣市町村の方々でしたが、エリモの岬からおいで頂いた方もおりました。懇談のほうも次第に弾んだころ、自己紹介に移りました。しばらくぶりの方も、初めての方も、素晴らしいお考えをもたれ、そして豊富な自然に触れられているご様子を伺い、この力が協議会の新しい力なんだなァーとうれしく感じました。未だ明るい西の空であったのに、２時間後の空には、星がきらめき始めました。
閉会宣言により、名残惜しい感じで星空を眺めつつ、仲間は散っていきました。今後は、会報を中心に、会員相互の信頼と、連携を密にして、関係機関との調整も一層深めながら、より良い協議会作りと運営に役員一同努め、会員の皆様の期待にこたえていきましょう。

事務局　（　大友　　健）

お願い

—— 北海道ボランティア・レンジャー協議会の入会申し込みと会費の納入について ——

入会は会則（第５条）により、会費の納入によって入会申し込み及び新規、継続会員としての手続きがされたものとします。

会務執行の都合もありますので、なるべく早く納入くださるようお願いします。

なお、事業年度は会則（第１５条）のとおり、８月１日から翌年７月３１日までです。

会費は３，０００円です。

郵便振替口座

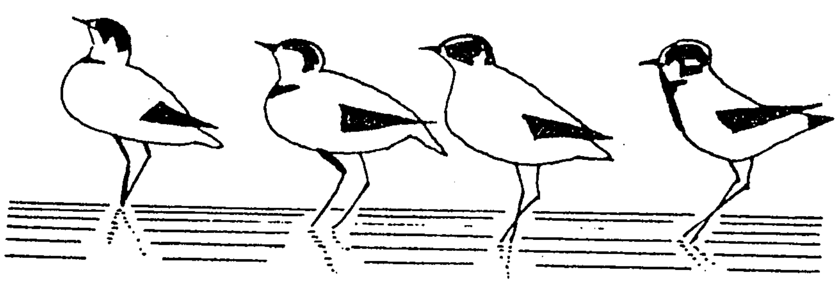
番号　小樽　８－２１４４２

名称　北海道ボランティア・レンジャー協議会

現金の納入やその他不明な点がありましたら、下記にご連絡をお願いします。

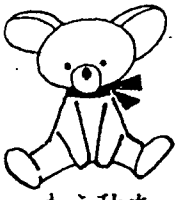
〒０６５　札幌市東区東苗穂６条１丁目８－２６

小竹数博　　電話０１１－７８４－６２５１



第６回定期総会に来賓として、ご多用のなか、北海道保健環境部自然保護課保全係から中川幸雄主任が出席されました。

また、この時に自然保護課長からのメッセージがありましたので全文掲載します。（広報部）



――――「自然保護課長メッセージ」――

例年にない涼しい夏であったせいか、お盆をすぎたとたん、もう秋を思わせる涼風に、今年の時のうつろいの早さを感じさせられます。

昭和６１年８月支笏洞爺国立公園内で第１回のボランティア・レンジャーの育成研修会が開催され、これを受講された方々が中心となって同年の１２月に「エゾマツ会」が設立されました。そして、昭和６３年には多くのボランティア・レンジャーの方々の参加と賛同を得て「北海道ボランティア・レンジャー協議会」に発展したと聞いております。その後、年々新たな会員を加え、活発な活動が行われ、昨年度は、秋と春に自らが企画し、主催をする「野幌自然観察の集い」等を実施し、たくさんの道民の参加を得、その活動は高く評価されているところであります。

特に、近年の道民の自然への志向の強まりもあり、マスコミ等にも、協議会の活動が取り上げられ、報道されるなど、ますます自然保護教育の重要性が評価され協議会の活動への期待が高まってきているところであります。

道もボランティア・レンジャーの育成については、昨年から年３回研修会を開催しており、今年は第８回を８月１日から丸瀬布町で実施し、第９回を９月５日から真狩村で、また、第１０回を１０月３日から当別町で開催する予定になっております。本年度３回の研修会が終了いたしますと、４００名を超えるボランティア・レンジャーが生まれることになり、ますます活発な活躍が期待されております。

また、ボランティア・レンジャーの事後研修についても平成元年から、実践セミナーを実施しており、本年は苫小牧のウトナイ湖畔で１１月１５日から開催する計画でございます。後日、皆様方にそれぞれ御案内申し上げますので御参加をお願いします。

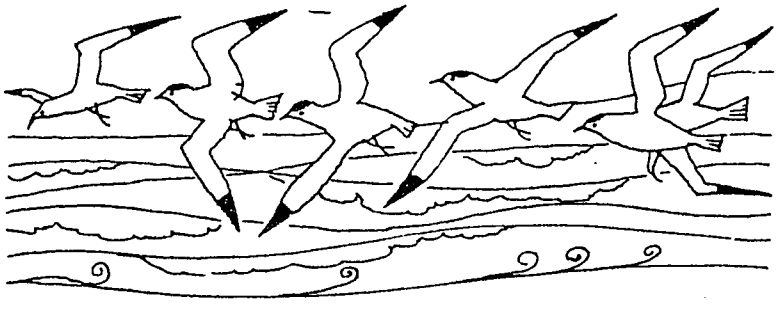
また、現在３００名余りのボランティア・レンジャーの方々が、全道各地で御活躍いただいておりますが、昨年から１４支庁で実施されております自然教室にも延２２回の開催に講師や、補助解説員として約７０名の方

々が参加いただいており、誠にありがたい事と感謝しております。

しかしながら、ボランティア・レンジャーの活躍につきましては、あくまでもボランティアであることの制約や、解説する側と受けようとする側のタイミングや考え方の相違等から、なかなか思うように活動いただけなかったり、また、全道に散らばるボランティア・レンジャー相互間の情報の伝達や、レベルアップのための組織的、体系的な研修体制の確立等、今後、いろいろ検討し整備していかなければならない問題点がございます。

そのような中で唯一、ボランティア・レンジャーの全道的、統一的な組織として本協議会の果たしている役割は、誠に重要かつ、かけがえのないものと考えております。

現在、協議会では、全道に支会をつくり、各地域の独自性を尊重しながら、全道的なネットワーク化に乗り出されたと聞いており、道といたしましても、誠に心丈夫なかぎりだと思っております。本日は本協議会が多くの人々の期待と要請にこたえて、明日に向け更なる前進をするために皆様方の熱心で、巾広い話し合いがおこなわれますことを心からお祈りいたしまして、メッセージといたします。



お知らせ

―― 平成３事業年度の広報「エゾマツ」について ――

８月２４日の第６回定期総会で本事業年度も、年４回の会報「エゾマツ」を発行することが承認されました。

会報は協議会会則の目的にありますように、会員相互の自然観察及び自然保護の意識を高め、情報交換や親睦を図る重要な役割を持っていることはご承知のとおりです。

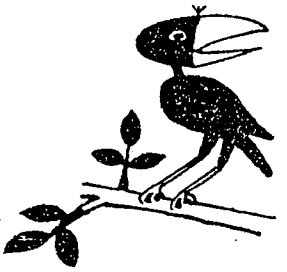
事業年度内のスケジュールは、次のようになりますので会員皆様のご協力をお願いいたします。

区分 ＼ 回数	１回目	２回目	３回目	４回目
号数	１９	２０	２１	２２
関係月	8.9.10.	11.12.1.	2.3.4.	5.6.7.
原稿締切予定日	H.3.10.15	H.4.1月15日	4 月15日	7 月15日
発行予定月旬	H.3. 10月下～11月上旬	H.4. 1月下旬～2 月上旬	4 月下旬～5 月上旬	7月下～8月上旬

少ない経費と多忙ななかでの特定の人のワープロ打ちなど、いくらかでも軽減できるように次のことにご協力下さい。

1．ワープロまたはパソコンを所有している会員は、自分の原稿は打って送るようにして下さい。（余白にカットも歓迎します。）

★　2．原稿の送り先は、山上とか佐々木にしていましたが、混乱する結果に　★
★　　なりますので、本事業年度は下記にお願いします。　★
★
★　　〒００３　札幌市白石区川下５条２丁目４－３２
★　　佐々木　幸夫　電話　011-875-6602
★
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★



◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇　お　知　ら　せ　◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

◇　――― ボランティア・レンジャー実践セミナーの開催について ―――　◇

◇　会報第１７号でも開催日などお知らせしましたが、北海道保健環境部自保護課では本年度もボランティア・レンジャー（自然解説員）を対象に、自然解説の実質的、具体的手法を中心とした実践セミナーを次のように開催することになりました。

◇　定員は３０名程度ですが、折角の機会であり参加されますように知らせします。

◇　○　開催期日

◇　　平成３年１１月１５日（金）１２時～１１月１６日（土）１３時４０分まで

◇　○　研修場所

◇　　「ウトナイレイクホテル」

◇　　苫小牧市植苗１５６　TEL　０１４４－５８－２１１１

◇　○　研修内容など

◇　　講師は、住友金属研究開発本部恵庭センター長　山岸　番氏、野生生物情報センター　小川　巌氏、ウトナイ湖サンクチャリネイチャーセンター　大畑　孝二氏、村井雅之氏で、研修内容は　・専門知識の習得について、・自然観察における企画・立案の方法について、・環境教育の

実際についてなど。

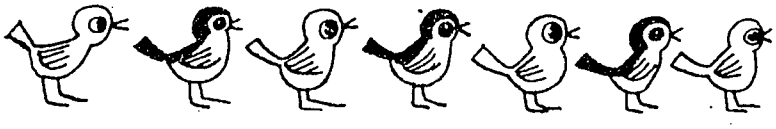
○　応募方法

往復ハガキに氏名、性別、年齢、住所、電話番号（自宅又は職場）、交通機関（自家用車又は、バス、タクシー別）、第○回受講済と明記の上、平成３年１０月２５日（必着）までに道自然保護課に申し込んでください。

○　その他

不明な点（申し込みも含む）がありましたら、下記住所の事務局にお問い合わせ下さい。

〒　０６０　札幌市中央区北３条西６丁目
北海道保健環境部自然保護課保全係
TEL　０１１－２３１－４１１１内線２５５７１



編集後記

「エゾマツ」１８号をお届け致します。
この１８号より、より紙面を見やくするために、今までよりも１ページ内の行数を少なく致しました。従って文章と文章の間がより広くなっていることにお気づきのことと思います。

「エゾマツ」は年４回発行されています。３か月に１回の発行です。原稿を早めにお出しいただいている方には「早く出していただいているのに申し訳ありません」といつも心に思いワープロを打たさせていただいています。係としては、投稿の際に投稿年月日を入れていただければこのうえない幸いです。読まれる方もその点を考慮して今後もご愛読いただければ幸いです。

（山上）